

# 天保十四年の キャリアオーバー

五十嵐貴久

最終回

二十一

1

松一ハ一七一ト、と鳥居とりいは読み上げた。間違いない。この十枚の陰富札かげとみふだの中に留札とめふだがある。河田かわだは見間違えているのだ。

理由もわかっていた。焦った蛭仁ひるじんが順番通りに並べることなく、その段の十枚を一度に渡したためだ。

松一ハ一七一ト、そして空から(0)から並べ直し、一枚ずつ末尾の数字を見ていった。空、一、二、三、四、五、六、六、七、八。

全部で十枚ある。だが、末尾に九の数字はなかった。

「どうということだ！」

両の眼を皿のようにして、鳥居はもう一度陰富札を改めた。空、

一、二、三、四、五、六、六、七、八。

大きく息を吸い、吐いた。六が二枚ある。だから十枚あっても九の札がないのだ。

「團十郎、一体何をした？ どんな手を使った？ いかにも陰富といえども、博奕は博奕。イカサマは御法度である。身分を偽っているお前が不正をしたことは、火を見るよりも明らか。そのような者が留札を当てたと言ひ張るなど、片腹痛い。この賭場は鳥居耀蔵が胴元である。その権限でお前の留札は無効とする！」

何を言つてやがる、と團十郎が分厚い手のひらで顔をひと撫でした。たったそれだけのことで、坊主から歌舞伎役者に面相が変わつた。

「おかしな話じゃねえか、お奉行様よ。正気で言つてんのか？ 博奕でイカサマが御法度なのは当たり前だが、その前に陰富そのものが天下の御法度じゃねえか。その胴元を務めているとぬかしやがったが、ご公儀の町奉行がそんなことをして、許されるわけねえだらうが！」

黙れ、と怒鳴つた鳥居に、知つたことかと團十郎が僧衣の袂から右腕を抜いた。

「おれが当たり籤を持つてることなどあり得ないと、あんたは言つたよな。どうしてそんなことが言い切れる？ あんたの言う通り、

陰富も博奕だよ。博奕つてものには、絶対なんてあり得ねえ。六万枚の陰富札のうち、たった一枚の留札をおれが持っていたって、ちつともおかしかねえんだ。イカサマを使ったのはあんたの方だよ。試しに後ろの襖ふすまを開けてみやがれ。もうひと組、あんたの作った六万枚の陰富札があるんじゃないかねえのか？」

待て、と河田が二人の間に割って入った。

「僧法良、いや、七代目市川團十郎いちかわ。お前が留札を持っていたことは確かだが、イカサマだったとすれば言うまでもなく許されぬ所業。取り置き金ほうびも褒美金も、お前には渡せぬ。そして鳥居殿、イカサマをしていないと言うのであれば、襖を開けてもらおう。我らは陰富に加わっていたが、それは鳥居殿が公正な胴元と信じていたからこそ。疑いがあれば、武に訴えてでも金子きんずは我ら賭け手のものとする。それだろうか」

河田様、そして皆様方、と鳥居は正座した。

「あのような歌舞伎役者崩れを信じると仰せおおですか。これは驚きました。白山屋しろやまの番頭やはともかく、他の方々は武家の出。武士が武士を信じなくて、何を信じるというのです。私はイカサマなどしておりませぬ。それよりも、市川團十郎が留札を持っていることを不審に思うべきではありませんか」

襖を開ければどちらが正しいかわかる、と河田が言った。それで

はおっしやる通りに致しましょう、と鳥居は襖に手を掛けた。

一一二

何もない、という声が出た。團十郎は大きな目玉を見開いて、続きの支度部屋を見回したが、畳が敷かれているだけである。陰富札はおろか、人影もなかった。

これでわかったであろう、と鳥居が立ち上がった。

「私はイカサマなどしておらぬ。イカサマを使ったのは團十郎、お前だ。どのような手を使ったのかは、これから詮議するが、いづれにしてもお前の留札は無効である。おとなしくお縄につけ。いや、待て……お白州で吟味できぬ以上、お前にはこの世から消えてもらわねばなるまい」

「上等だよ、この野郎」團十郎は握りしめていた陰富札を鳥居の顔に突き付けた。「同じ台詞をそっくり返してやらあ。おれはイカサマなんかやってねえ。おめえの手下の目明かしが、あの部屋を片付けちまったから、証拠は残っちゃいねえが、おめえがイカサマを使うとしたのは誰が見たってわかるこった。そもそも、陰富札を作ったのはおめえじゃねえか。六万枚だぞ？ 書き損じだってあっただろう。松―ハ―七―ト―六の札が二枚あったのは、誰のせいでもね

え、おめえが悪いんじやねえのか！」

おおきこ  
大迫、と鳥居が叫んだ。襖が開き、そこに抜刀した十人の与力、  
よりき  
同心が立っていた。

「南町奉行所に奉行の許しなく入った者がいる。その僧衣を着た  
男だ。直ちに召し捕れ。逆らうようなら切り捨てても構わぬ！」

本気かよ、と團十郎は両手で座布団を掴んだ。

「奉行所内でおれを殺すつもりか？ そんな話は聞いたことがねえ。  
町奉行なら町奉行らしく、おれを捕らえてお白州で吟味すりゃあい  
いだろう。それがおめえらの役目なんじやねえのか？」

なりたや  
成田屋、と伸輔が口に手を当てて叫んだ。懐かしいぜ、と團十郎  
は大きく見栄を切った。

「鳥居耀藏、よおく聞け。おれが留札を持っていたことは、ここに  
いる皆が見ている。見ていねえと言ひ張るなら、それもいいだろう。  
だがな、天知る地知る我知る人知る。おれを殺したって、てめえの  
罪は消えねえぞ！」

お前は罪人だ、と鳥居が静かな声で言った。

えどしほうじゅうりや  
「江戸四方十里所弘の身にもかかわらず、ここにいること自体許  
されぬこと。それだけでも斬首に処すことができる。町奉行である  
私の命に従わぬ者はいない。河田様、他の皆様もこの場はお引き取  
りいただきますしよ。ここで何があつたかは他言無用。ひと言でも

口にすれば、皆々様方だけではなく、お家、藩にもその罪が及ぶで  
ありましょう。おわかりですか」

何も見ておらぬ、と言いつ捨てた河田が足音高く賭場を後にした。

その後二人の男たちが続き、残ったのは團十郎一人だけになった。

「ずいぶんと阿漕あこぎな真似まねをするじゃねえか」呆あきれたよ、と團十郎は

座布団あぐらを捨てて胡座あぐらをかけた。「斬りたきや斬りやがれ。だがな、

そんな無法がいつまでもまかり通ると思うなよ。いい気になってる

と――」

やれ、と鋭い声で鳥居が命じた。ここまでか、と團十郎は目を固  
くつぶった。

## 一一三

鳥居様、と叫ぶ声に、團十郎は目を開いた。駆け込んできたのは

目明とめあきかしの時蔵ときぞうだった。

おおめつけ

とおやまかげもち

「大目付、遠山景元様とんざんけいげんが表おもてにおりやす。南町奉行所なんちやうへいぎやうじよに罪人とらがいると  
聞き、その詮議せんぎに来たと申されておりますが、いかがいたしやしよ

う」

入れてはならぬと鳥居が首を振ったが、時蔵の後ろに影が差した。

大目付遠山景元とんざんけいげんが編笠あみがさを目深めふかにかぶった三人の侍さむらいを連れて、支度部

屋へと入ってきた。

六尺（一八〇センチ）ほどの大柄な男で、この年ちやうど五十歳である。北町奉行から大目付に昇進していたが、これは名奉行として名高い遠山をその職から外すための鳥居の策謀によるもので、この時代の大目付は実質的な権限のない閑職かんしやくであった。

ただし、幕府という組織においては、大目付の方が町奉行より位が高い。助かった、と團十郎はつぶやいた。

天保期の改革において、老中頭ろうじゆうがしらの水野忠邦みずのただくにとその側近であった鳥居耀蔵とりいに公然と反旗はんきを翻ひるがえしたのは遠山景元とやま、そして鶴松つるまつの養父、矢部定謙やべさだのりだけであった。

鳥居とりいの讒言ざんげんによって南町奉行の職を追われた定謙が自害した時、遠山も大目付職に棚上げされ、政治的な力を失っていたことは、よく知られていた。その後水野は失脚したが、町奉行として残った鳥居と遠山は反目する立場である。

直訴じきそするなら今しかない、と團十郎は遠山に駆け寄り、頭を畳にこすりつけた。

「申し上げます、遠山様。南町奉行鳥居耀蔵は奉行所内において陰富の賭場を開帳し——」

いきなり目の前に星がちらついた。遠山とやまに足蹴あしげにされたとわかったのは、その後である。

「何をなさいます！ わたしは鳥居の非道な行ないを……」

役者風情がその口の利き方は何だ、と遠山が大喝した。

「身分をわきまえよ。鳥居耀蔵は三奉行の筆頭、町奉行である。呼び捨てにするとは、幕府への不敬と同じ」

「ですが——」

しかもお前は罪人、と遠山が團十郎の頬を張った。

「手鎖の処分を受けた後、江戸を追放されたのは子供でも知っている。何をおめおめ舞い戻ってきたのか。ましてや町奉行に対し、陰富の賭場を開いていたなど笑止千万。そのような嘘が許されると思っているのか。そもそも奉行所内に立ち入るとは、何の魂胆があつてのことか。奉行の許しなしに入ることができるのは大目付、若年寄、老中など限られた者だけ。いったい何を企んでいた？」

そうではありませぬ、と團十郎は遠山の足にしがみついた。

「この市川團十郎の話聞いてください。奉行所を賭場にして鳥居が陰富を開帳していたのは、紛れも無く本当の話でございます。関わっていた者たちは大藩の江戸家老をはじめ、旗本、御家人、その他に……」

また星が飛んだ。遠山が刀の束で團十郎の顎を打ちすえたのである。

「町奉行を呼び捨てにするとは、無礼にもほどがある。奉行所内で



町奉行が陰富の賭場を開くなど、あり得るはずもない。ましてや武士が加わっていたなどと、ぬけぬけとした嘘をつくとは……鳥居奉行、役目柄ゆえ念のため尋ねるが、この男の言っていることは真か？」

まさか、と鳥居が顔をしかめた。

「陰富は天下の御法度。町奉行である私がそのような真似をすると、大目付はお考えでございませうか？ 役者崩れのこの男の戯れ言を信じると？」

もつともである、と遠山が大笑した。

「町奉行と罪人を比べることなどできるはずもない。考えるまでもなく、嘘を吐いているのはこの男。ただし、奉行に対してもひと言申さねばならぬ。このような不逞の輩が奉行所内に入り込んだことは、奉行の怠慢と思われてもやむを得ぬ。そうであろう」

申し訳ございませぬ、と鳥居が頭を垂れた。見逃したお前たちも同罪である、と遠山が控えていた与力、同心たちを一喝した。

「後のことは奉行に任せるが、この男は重ければ死罪、軽くても遠島ということになる。どちらでも構わぬが、早急に吟味し、処分を下すように。このことを江戸市中の者が知れば、面倒なことになるからな」

今夜中に必ず、と鳥居が答えた。そりや酷過ぎる、と團十郎は遠

山の足首を掴んだ。

「遠山様、どうしちまったんです？ 歌舞伎そのものを潰そうとした老中頭の水野様に反対し、江戸三座を猿若町さるわかちように移すことで話を収めてくれたのは、遠山様だったはずでは？ それなのに死罪だ遠島だ、今になってそんな厳しいことをおっしゃるとは……それに、わたしはもう役者じゃありません。それなのに、どうしてこんな——」  
触れるな、と編笠の侍が前に出た。

「遠山様、その者からお離れください。懐に何やら隠し持っているようにございます」

この者たちはと尋ねた鳥居に、火付盗賊ひつけとうぞくあらためかた 改方の編笠同心、と遠山が答えた。

「大目付に配下はおらぬ。それゆえ、この者たちを使っている」  
離れる、と怒鳴った編笠の侍が刀を抜いた。止める、と團十郎は恐怖にかられて叫んだ。

「おれは何もしちゃいねえ。こんなところで死にたくねえ、助けてくれ！」

編笠の侍が團十郎の胸倉を掴んで立ち上がらせ、そのまま袈裟けさ切りに斬って捨てた。血しぶきが飛び、團十郎の体が前のめりに倒れた。

いきなりの刃傷沙汰にんじょうざたに、支度部屋の隅で体を縮めていた鳥居に、これでよいのだ、と遠山が言った。

「このような罪人の一人や二人、死んだところで構うことはない。後腐れなくすべて終わる。そうであろう」

大目付のおっしやる通りでございませうなずいて、鳥居は震える手を伸ばし、倒れている團十郎の背中を突いた。

ぴくりとも動かない。死んでいるとわかり、安堵あんどの息を吐いた。

「小早川静之信こばやかわけいのしん、よくやった。さすがは新陰流しんかげの達人である」

編笠の侍が刀を鞘さやに収め、一礼した。それはともかく、と遠山が顎に指をかけた。

「後始末をどうするか……鳥居殿、どうお考えか。南町奉行所の差配に任せるか、それとも我らの方で片付けるか」

大目付の命に従いまする、と鳥居は答えた。しばらく考えていた遠山が、斬ったのは小早川である、と下唇を突き出した。

「面倒だが、我々が何とかするしかあるまい……幸い、今日は大

晦日みそか。日も暮れている。駆け込み訴えをしにくる者もおらぬである。鳥居殿、明朝まで刻ときを貸してくれぬか。南町奉行所の手の者は借りぬ。むしろ、誰もおらぬ方がよろしかろう。さすれば、この遠

山が大目付の権限で何もなかったことにする。いかなりや」

よろしきように、と鳥居はその場にいた与力や同心に手を振った。男たちが足早に離れていった。

「門衛も含め、他の者もすべて八丁堀の屋敷へ戻すことに致します」  
岡っ引き、下っ引きもそのように、と鳥居はうなずいた。「私は奉行所内の私邸に戻り、何も見ず、聞かず、言わず、三猿を決め込むということで」

それがよろしかろう、と遠山が大きな口を開けて笑った。

「礼には及ばぬ。知つての通り、大目付はただの飾り雛かざりひな。日ごろは何もすることがないゆえ、退屈たいくつでな。たまにはこんなこともあっていい……ところで鳥居殿、大きな声では言えぬが、陰富うわぶの噂は他からも耳に入っておるぞ」

そのような嘘事うそごとに耳を傾けてはなりませぬ、と鳥居は首を振った。「この鳥居を憎んでいる者たちが、つまらぬ噂を流しているだけのこと。まさか大目付も、そのようなことを信じては……」

信じておらぬ、と遠山が正面から鳥居の顔を見据えた。

「ただ、ひとつ相談したいことがあってな。実は、娘が嫁に行く。めでたいことだが、祝言しゅうげんにはこれがかかる」

太い指で丸を作った遠山に、お相手はどなたでありましょう、と鳥居は尋ねた。ここだけの話である、と遠山が声をひそめた。

「尾張藩主徳川齋莊様のご養子、隆次様のもとへ参る」

尾張藩、と鳥居は唾を飲み込んだ。徳川御三家の筆頭である。

養子とはいえ、そこへ嫁入りするというのは、さぞ金がかかるであらう。

これもまたここだけの話だが、と遠山が左右に目をやった。

「手元不如意でな。相談とはそのこと。すまぬが、一万両ほど用立ててくれぬか。陰富のことはあくまで噂。今はこの遠山の胸ひとつに収めているが、たまに話したくなる時がないわけでもない」

鳥居は頭の中で算盤を弾いた。遠山が脅しているのはわかってい  
たし、返済するつもりもないのだろう。

だが、一万両など今の自分にとっては端金も同然だ。これまでの  
取り置き金の百万両、そして今回の湯島千両陰富の上がり  
が五十万両近くある。一万両を遠山にくれてやり、貸しを作っておく方が得  
だ、とうなずいた。

「年が明け次第、すぐにご用意致します」

遠山の顔に笑みが浮かんだ。密約が成立したことに、鳥居は安堵のため息をついた。

半刻（約一時間）が経った。

どうだ、と遠山が辺りを見回した。今しばらくお待ち下さい、と編笠の侍、小早川静之信がうなずいた。

もういいだろう、とうつ伏せたまま團十郎は顔だけを横に向けた。「体が痛えよ。まったく、いきなり殴られたり斬られたり、こっちの身にもなってみろってんだ」

奉行所には誰も残っていません、と戻ってきた二人の侍が編笠の紐を解いた。お葉と談志がお互いを指さして笑い声を上げた。

やれやれ、と肩をすくめた小早川が自分の編笠を取った。矢部鶴松が微笑を浮かべて、二人の背中を叩いた。

いったいどうなってる、と團十郎はその場に胡座をかいて、腕を組んだ。

「一から十まできっちり話してもらおう。そうじゃなきゃ、おれはここから一步も動かねえぞ。まったく、本気で斬られるかと思っただぜ。見ろ、まだ鳥肌が消えやしねえ」

腕を伸ばした團十郎に、斬られてくださいと言ったはずです、と鶴松が笑みを濃くした。

「天下の七代目市川團十郎です。機転を利かせて斬られたふりをするぐらい、お手の物でしょう」

大体、お前がどうしてここにいる、と團十郎は鶴松に顔を向けた。

「あの時、お前は蛭仁に捕まって、この奉行所の牢に叩き込まれたはずだ。おれも手鎖になった時、ひと晩入ったことがあるが、半地下で三方の壁は頑丈だし、扉には鍵がかかっている。おまけに、始終同心が歩き回って見張ってやがる。そんなところから、どうやって逃げたっていうんだ？」

簡単です、と鶴松が懐から二つに折った手拭てぬぐいを出した。開くと、そこに一本の鍵があった。

「養父、矢部定謙が鳥居ざんげんの讒言なによって南町奉行の職を奪われ、桑名藩預かりの身となったのは、前にも話していたはずですが」

聞いたよ、と團十郎はうなずいた。その後、養父は身の証しを立てるため、切腹して果てました、と鶴松が言った。

「何もしてやれなくて、済まなかったな」

遠山が小さく頭を下げた。いえ、と鶴松が首を振った。

「あの時、養父の弁明に立てば、遠山様も蟄居ちつきよせざるを得なかったでしょう。懸河けんがの弁べんをふるっても、鳥居が吟味役を務めている限り、どうにもならないのはわかっていました。大目付の職に留まっていただけだからこそ、今回の大芝居がうまくいったのです」

定謙は真の友であった、と遠山が右手で顔を覆おおった。いいのです、と鶴松が慰めるように言った。

「遠山様がうまく話をつけてくださったおかげで、養父の遺品は無事わたしの元に届きました。遺髪はもちろんですが、この鍵もそうです」

許せ、と遠山がもう一度頭を垂れた。こいつは、と團十郎は手を伸ばして、鍵をつまみ上げた。

「まさか、南町奉行所の牢の鍵なのか？」

今の南町奉行は鳥居ですが、その前は養父定謙でした、と鶴松が言った。

「奉行とその家族は、奉行所内の屋敷で暮らします。短い間でしたが、わたしもここに住んでいたのです」

そういうこった、と談志がうなずいた。わたしは奉行の息子ですよ、と鶴松が笑った。

「どこへ出入りしようと、咎とがめる者などいません。奉行所内のことは、すべて知っていました。もちろん、牢についてもです。常に鍵がかかっていますが、これさえあれば簡単に扉を開けることができます」

続きを聞かせろ、と團十郎は鍵を畳の上に放った。鳥居が奉行所内で陰富の賭場を開いていることは、前々から噂が流れていました



と、鶴松が左右に目を向けた。

「鳥居の狡猾さが、それだけでもわかります。町奉行の許しがなければ、誰も奉行所に入ることはいけません。言ってみれば、絶対に安全な場所なのです。だから、あの男はここを選んだ。養父を追放し、自らが町奉行の職に就いたのも、本当のところそれが目的だったのでしょう。博奕の胴元ほど、儲かるものはありませんからね。金の亡者の鳥居にとって、南町奉行所は金の卵を産む鶏と同じだったのです」

その先は、と團十郎は膳部に残っていた徳利を取り上げ、そのまま口をつけた。

「陰富の場になっているのはわかっていましたが、訴えても無駄ですし、踏み込むこともできません」

何しろわたしは単なる浪人に過ぎませんからね、と鶴松が肩をすくめた。

「しかも、確たる証拠さえないので。遠山様をはじめ、他にも幕閣への伝こそありましたが、踏み込んで何も出てこなければ、恥を掻かせることになりません。鳥居の権勢には、若年寄さえ逆らうことができません。それを思うと、どうすることもできませんでした。奉行所の中に入る手はないのです」

ひとつだけあるだろうと言った團十郎に、そうですと鶴松がうな

ずいた。

奉行所内に入れるのは、と鶴松が指を折った。

「奉行、与力、同心、その手下の岡っ引きや下っ引き。その他は奉行の家族、そして奉行の許しがあつた者だけです。それでは中で騒ぎを起こすことなどできません。ですが、ひとつだけ奉行所に入るための抜け道があります」

罪を犯して捕縛された者、と團十郎はつぶやいた。そういうことです、と鶴松が言った。

「わたしはお葉さんを救うために目明かしたちと立ち回りを演じ、お葉さんを盾に取つた蛭仁に屈し、お縄につきました。ただし、罪は認めていません。町娘が暴漢に襲われたと勘違いして、それを救おうとただけだと訴えました。刑罰が決まるまでは、奉行所内の牢に留め置くのが定法。じようほう鳥居もわたしを牢に入れておくしかありませんでした。そうやって、わたしは絶対に入れないはずの奉行所に堂々どうどうと入つたのです」

この鍵を持ってだな、と團十郎は別の徳利を掴んだ。

「まったく、酒でも飲まなきややってられねえよ。お前は牢に入り、この鍵で扉を開けた。見張っていた同心をぶん殴つて、気を失わせるぐらい、お前ほどの腕なら簡単だったろう。それからどうした？」

奉行所はわたしの庭も同然です、と鶴松が微笑んだ。

「造りはすべて頭に入っていましたし、どこに何の間があるのかもわかっています。陰富を開帳するため、鳥居が人払いをしていたので、支度部屋の続きの間に入るのは楽なものでした。六万枚の陰富札を前に、大汗を掻いている蛭仁に当て身を食らわせ、気を失わせただで手足を縛り、猿轡さるくつわをかませて、廁かわやに閉じ込めたのです。あれが一番大変でしたね。何しろあの男は図体がでかくて、運ぶのにもひと苦勞でしたよ」

つまりお前は蛭仁とすり替わったわけだ、と團十郎は徳利の酒を猪口ちよこに注いだ。

「そいつはとんだ総替そうかえノ法ほうだな。お前は留札の番号を知っていた。松一ハ一七一ト、その段の十枚だけを残し、後の五万九千九百九十枚は畳の裏にでも隠したか？」

さすがに察しがいいですね、と鶴松が手を叩いた。

「わたしはその十枚を細く開けた襖の隙間から、鳥居に手渡ししました。一枚だけ、末尾の数字を九から六に書き換えた陰富札をです。その後のことは、言うまでもないでしょう。奉行所内で刃傷沙汰が起きているという名目で、大目付の遠山様が火付盗賊改方の編笠与力二人、つまり談志師匠、そしてお葉さんを連れて門を開けさせ、用意していた衣装に着替えたわたしもそれに加わりました。奉行所内で騒ぎが起きているとなれば、大目付が中へ入ることができません

から。そして僧法良に化けていた罪人の市川團十郎を斬り殺したというわけです」

大目付は各奉行の上に立つ、と遠山が言った。

「無論、それは建前。大目付の職はあくまでも飾りに過ぎぬ。だが、建前でも使えようはあるのだ」

お前が編笠を上げた時ぐらい驚れえたことはねえ、と團十郎は大きな鼻を手でこすった。

「どうしてお前がここにいると思ったが、死んでくださいと唇を動かしたのだけはわかった。おれも役者だ、舞台では相手役に合わせなきやならねえ時がある。鼻先すれすれのところを刀が振り下ろされた時には、小便が出そうなくれえ恐ろしかったが、覚悟を決めるしかねえ。一世一代の死んだふりを決め込むしかねえだろう。そう言やあ、あの赤いのは何だ？」

食紅だよ、とお葉がくすりと笑った。なるほどな、と團十郎はうなずいた。

「歌舞伎の舞台でもよく使うよ。それにしても、どうしてそれならそうと言ってくれなかった？ わかってりやあ、もうちっとうまい芝居ができただろうに」

最初から筋立てがわかっていたら、と鶴松が言った。

「七代目の芝居はあそこまで真に迫らなかつたでしょう。あなたは

江戸一の役者です。どうしたって役柄を演じてしまったはずです。勘の鋭い鳥居を騙すためには、すべてが真でなければなりません。わたしに斬られた時の七代目の恨めしげな顔は、誰が見たって本物でしたよ」

勧進帳かんしんちょうだな、と團十郎はつぶやいた。

歌舞伎十八番の中で最も人気の高い演目『勧進帳』の見せ場は、安宅あたかの関を抜ける際、白紙の巻物を勧進帳であるかのように読み上げる弁慶べんけいの芝居である。

安宅の関の関守とがしのさえもん、富樫左衛門の問いに機転で返す弁慶は、その後疑いをかけられた主君の義経よしつねをわざと金剛棒で打ちすえ、その疑いを晴らす。

今回の場合、鶴松が弁慶を、そして團十郎は義経を演じた。唯一違うのは、なぜ斬られるのか義経自身がわかっていないことだったが、それは言っても始まらないだろう。

「おれにとつちや、損な役回りだったが、こればかりは仕方ねえ。忘れてやるよ。それじゃ、さっさと逃げようじゃねえか。いつまでもここにいたんじゃまずいだろう」

焦ることはない、と遠山が火をつけた煙管きせるを團十郎に渡した。

「今、南町奉行所内には、与力、同心はおるか岡っ引き、下っ引き、それどころか猫の子一匹おらぬ。大晦日ゆえ、門衛も八丁堀の屋敷

に戻った。奥の奉行屋敷に、鳥居とその妻子がいるが、朝までは出てこぬだろう。今、亥の刻いぬ（午後八時）だから、卯の刻う（午前六時）まで五刻（十時間）ほどある。それだけあれば十分だ」

何が十分なんだと尋ねた團十郎に、奉行所の門は開きつ放しだよ、と談志が顔中を皺しわだらけにして笑った。

「おいらの仲間が集まって、鳥居が隠していた取り置き金の千両箱を運び出す手筈てはずになつてゐるんだ。もちろん、今日の陰富の賭け金もだよ。二千箱近くあるから、しばらく刻はかかるだろうけど、朝までには終わるさ。手を貸してくれた連中にも礼をしなきゃならねえし、他にもいろいろあるが、主役の七代目にもたんまり分け前があるから心配すんなって」

ふん、と團十郎は鼻から荒い息を吐いた。

「師匠、おれを誰だと思つてやがる？ 天下の七代目市川團十郎だぞ？ おれの芸に値をつけられてたまるか。金なんかいらねえよ。

むしろ、こつちが払いてえぐらいだ」

どうしてだと首を捻ひねつたお葉に、本物の芝居つてやつを教えてもらったからさ、と團十郎は膝を叩いて立ち上がった。

「さて、これからどうなるんだ？」

七代目にはわかつてゐるはずです、と鶴松が言った。

そうか、と團十郎はうなずいた。後は仕上げをろうご覧じろつてわけ

か。

二十六

年が明けた。天保十五年睦月むつき（一月）一日の朝である。

正月一日ということ、この日は誰もがのんびりと過ごすが、鳥居は夜明けと共に寢所しんじょを出て、衣服を着替えてから奉行所へ向かった。

（馬鹿な騒ぎだったが、終わり良ければすべて良し、か）

薄い唇からつぶやきが漏れた。吐く息は白い。

大目付の遠山景元が乗り込んできた時には、己の目を疑ったが、要は罪人である市川團十郎を捕縛するために来たのだ。

江戸に戻っていた團十郎を火付盗賊改の編笠同心が切り捨てたのはやり過ぎだと思っただが、遠山は果断かたんの人として知られている。罪人を殺したのは、それが役目なのだから当然だろう。

歌舞伎役者崩れなど、切り捨て御免ごめんで構わない。團十郎が死んだことは、鳥居にとっても好都合だった。

團十郎が斬られたことで、河田をはじめ陰富に加わっていた者たちは、今後賭場にいたことを口外できなくなる。もちろん、自分たちの取り分についても言えるはずがない。最初からの狙い通り、取

り置き金の百万両も褒美金も我が物になったのである。

「さすがに正月」

めでたいことが続く、と歩を進めながら鳥居は独り言を言った。

あの堅物の遠山かたぶつでさえも、金の力に屈したのだ。

南町奉行所での陰富について、遠山は薄々感じていたのだろう。

証拠がなかったため、何もできずにいたが、いつの頃からか、沈黙を金に替えた方が得だと思いついたに違いない。

誰でもそうだろう。この世で一番強いのは金であり、誰もがその力に屈するしかないのだ。

早急に遠山に一万両を届けねばなるまい、と鳥居は苦笑を浮かべて支度部屋に上がった。口止めのための金子だが、決して高くはない。

この場合、一万両は賄賂わいろである。受け取った遠山も同罪となるから、今後鳥居とは一蓮托生いちれんたくしょう、何があっても鳥居の側に付かざるを得ない。

老中頭の土井利位どいとしつゐをはじめ、幕閣有力者には鼻薬はなぐすりを利かせていたが、遠山にだけは通じないとわかっていた。大目付はお飾りの職に過ぎないが、大監察とも呼ばれるように、三奉行をはじめあらゆる奉行を内偵、告発できる権能がある。

その位は旗本の中でも江戸城留守居役るすいやく、御三卿家来衆ひつてきに匹敵する



ほど高い。言わば、鳥居にとって目の上のたんこぶだった。

いずれ隠居に追い込むつもりだったが、一万両で転ばせることができるなら、安い買い物だ。鳥居耀蔵を敵に回す者はいなくなったと断言できる。

支度部屋を見回すと、昨日の喧噪けんそうが嘘のように静かだった。すべてが元通りになっていた。

さすがは遠山景元、と鳥居はうなずいた。團十郎の死体も、闇に葬ったのだろう。

踵かかとを返し、支度部屋から外へ出た。奉行所の軒下、地下に隠してある取り置き金の百万両、そして昨日の陰富のあがりあがりを確かめなければならぬ。五十万両ほどあるはずだったが、正確な額は数えていなかった。

陰富の賭場を開帳するようになって、何年も経つが、最も難しかったのは金子をどこへ隠すかだった。

千両箱は縦一尺三寸二分(約四〇センチ)、横四寸七分(約十四・五センチ)、深さ四寸(約十一・三センチ)である。ひと箱、ふた箱ならともかく、百万両、つまり千箱を越えると、屋敷内に置く場所はない。あつたとしても、重さで床が抜けるだろう。

だが、南町奉行職に就いたことで、金子の隠し場所の問題は解決していた。飼い慣らした蛭仁たち目明かしに命じ、奉行所の軒下に

穴を掘らせ、そこに千両箱を積み上げていったのである。

奉行所内では奉行の権限が絶対であり、与力、同心でも意見を上げることは許されない。不審に思う者もいただろうが、余計なことを言えば処分されるだけだ。誰もが見て見ぬふりをしていたが、己の身を護るためには、そうするしかなかったのである。

軒下の観音扉かんのとびらを開くと、そこに階段があった。降りていくと、巨大な空間がそこにあった。

鳥居は首を捻った。睦月一日、夜が明けて間もない。観音扉からまだ弱々しい陽の光が差し込んでいただけだったが、それでも中は見えた。

いくら目を凝こらしても、そこに千両箱はなかった。昨日まであった千数百箱の千両箱が消えうせていた。

何かの間違まちがいだ、とつぶやきが漏れた。地下に掘った穴は薄暗い。目が慣れていないだけなのだ。

だから、何も見えない。そうに決まっている。

だが、穴の中を歩き回り、手で探っても、そこにあるはずの千両箱に触れることはなかった。巨大な空間の中は空っぽだった。

#### (遠山)

奥歯が折れそうになるほど齒軋はぎしりしながら、そのまま階段を駆け上がった。千数百の千両箱を盗んだ者は一人しかいない。大目付の

遠山景元だ。

(この鳥居耀藏を謀るとは)

開いたままになっていた奉行所の門を抜け、表に出た。遠山家の

上屋敷は芝愛宕下である。

駆け出そうとした鳥居の足が止まった。門のすぐ脇に遠山が立つ

ていた。

「これは鳥居殿。正月早々血相を変えてどうなされた」

声をかけてきた遠山に、ぬけぬけとしたことを、と鳥居は顔を近

づけた。

「此度の所業、大目付といえども許すわけには参りませぬぞ。わたしを誰だと思ってる？ 南町奉行、鳥居耀藏である。盗っ人を捕ら

えるのは町奉行の役目。大目付であろうとも、金子を盗めばそれは

科人。尋常にお縄につけ！」

大声を出すな、と遠山が鼻をすすった。

「まだ寒いな……正月一日である。陽も明けきってはおらぬ。騒ぎを起こして損をするのは奉行の方だろう」

「何を言う。いいから今すぐ盗んだ金子を返せ！ 百万両、いや他

の金子も耳を揃えて——」

やかましい、と遠山が怒鳴った。その迫力に、鳥居は思わず口を

つぐんだ。

「では聞こう。鳥居殿、奉行所の金子とは何か。百万両を盗まれたと申すが、そのような大金がなぜ奉行所にある？ この遠山景元、前職は北町奉行である。奉行所に置いてある金子は数百両がいいところ。幕府開闢かいびやく以来の旗本であるこの遠山が、数百両の金子を盗んだと申すのか」

そうではありませぬ、と鳥居は一步下がった。

「つまり、その金子は……」

まさか陰富で溜め込んだものではあるまいな、と遠山が詰め寄った。

「陰富は天下の御法度である。市中では、南町奉行所内で陰富の賭場が立っていると噂されていたが、そのようなことはあり得ぬと、この遠山自らが周りの者にも言い置いている。南町奉行が陰富の胴元になるなど、そんな馬鹿なことがあるはずもない。そうであろう？」  
痙攣けいれんが止まらなくなっている顔をごまかすように、鳥居は無理やり笑みを浮かべた。

「遠山様の申される通りでございます。ですが、ですが……あの金子は——」

そのようなものはなかったのだ、と諭さとすように遠山が言った。

「よいか、鳥居。百万両と申したが、それだけの金子が南町奉行所内にあつたとすれば、その出所について詮議せねばならなくなる。

困るのはお前であろう。どう言い繕つくろっても、百万両はごまかし切れぬ。町奉行のお前が陰富の胴元を務めていたとなれば、庶民からどれだけ怨嗟えんさの声が上がるか。幕府としても、町奉行が陰富に関わっていたとなれば、放つてはおけぬ。どう転んでもお前に得はない。何もなかったことにするしかなかろう」

遠山様、と鳥居は背伸びをして、遠山の耳元に口を近づけた。

「ご息女が嫁入りするのでございましょう？ 祝言とは何かと物入りなもの。昨日は一万両と申されておりましたが、その倍、いや十倍の金子をお渡しします。それゆえ、何卒なにとぞ今回の件はお見逃しいただませぬか」

娘は三人いる、と遠山がうなずいた。

「だが、三女が嫁に行ったのはもう八年も前の話。祝言などあるはずもない」

おれを騙したのか、と鳥居は遠山に掴みかかった。

「畜生、金を返せ！ あれはおれの金だ！」

お前ほどの知恵者があるような戯言ざれごとを信じるとは、よほど金に目が眩くらんだと見える、と遠山が口元を歪ゆがめた。

「よく考えてみよ。遠山家は由緒こそあれ、ただの旗本に過ぎぬ。

その娘が尾張藩主の養子の嫁になど、入れるはずがなかろう」

金はどこだ、と鳥居は周りを見渡した。

「いいか、よく聞け。大目付など、単なる飾り。この鳥居耀蔵が老中頭の土井利位様とどれだけ近しいか、そこはわかるまい。土井様に訴え出れば、大目付の職などすぐにでも奪えるのだぞ」

哀れよの、と遠山がつぶやいた。

「この遠山景元、鬼奉行と呼ばれたこともあるが、情けの心はあるつもり。それゆえ申すが、土井利位様は一昨日老中頭の座を退くと上様にお伝えしている。無論、慰留されているが、それは形だけのもの。土井様は和蘭との開国交渉で失態を犯し、心を病んでおられた。他の老中からも責を問う声が上がっている。自ら老中頭を辞めると申し出たのも、それ以外どうにもならぬからなのだ」

嘘だと叫んだ鳥居に、ここからが話の要と遠山が言った。

「土井様が老中頭を辞めれば、その代わりを務める者が必要となる。言いにくいことだが、今の幕閣にそれだけの人材はおらぬ。そうであれば、老中頭は一人しかない」

まさか、と鳥居は目を大きく開いた。そうだ、と遠山がうなずいた。

「上様は前老中頭水野忠邦様を復職させるご意向。お前ほど頭が良ければ、その意味はわかるはず」

鳥居はその場に崩れ落ちるように膝をついた。そんな馬鹿な、というつぶやきが薄い唇から漏れた。

天保期における改革が失敗に終わったことで、水野忠邦は失脚した。その水野に拔擢はつてきされ、懐刀ふところがたなとして改革を進めていたのが鳥居である。

だが、誰よりも水野に近かったため、遠からず改革が不首尾となることに気づき、水野の改革に反対していた土井に寝返った。水野が失脚した最も大きな理由は、鳥居の裏切りにあった。

水野が老中頭に復職すれば、何よりも先に人事刷新を図るだろう。実際には報復人事である。自分を裏切った鳥居のことを、どれだけ恨んでいるのか。

裏切り者は必ず報いを受ける、と遠山が鳥居の肩に手を置いた。「相応の覚悟はしておくべきであろう。よいか、これは忠告と思え。

身辺をきれいにしておくことだ。とはいえ、染みついた汚れは落ちぬもの。何をしてもしれぬが」

背を向けた遠山が去って行った。呆然としたまま、鳥居はその後ろ姿を見送った。

## 二十七

睦月七日早暁そうぎよう、旅支度を整えた團十郎は、蝸牛長屋かたつむりの外に出た。本当に行くのかい、と待っていたお葉がうつすら浮かんでいた涙

を拭った。そうするしかねえだろう、と團十郎はうなずいた。

「南町奉行所で斬り殺された男が、江戸の町をうろろしているわけにもいくまいよ。それに、あの時おれは芝居つてものが少しわかった気がする。名人だ何だと持て囃はやされてきたが、とんでもねえ。おれなんざ役者のやの字もわかっちゃいねえつてな。昔の侍なら武者修行に出るところだ。おれもまだまだ修行が足りねえ。諸国を巡って、芝居つてものをとことんまで突き詰めようと思ってる。泣くこたあねえ。晴れの門出だ、笑って見送ってくれ」

体を大事にな、と長屋から出てきた談志が声をかけた。師匠こそ、と團十郎は笑った。

「あんたもいい歳だ。無理するんじゃないぞ。何、すぐ戻ってくるさ。こう見えて、物学はえびは早え方だし、何よりおれには江戸が一番よく似合うからな。湿っぽいのは苦手だ。ここでお別れとしよう…  
…ところで、鶴松はどこだ？」

お葉が前を指さした。大きな松の木の下で、鶴松が座っていた。

面つらを貸せ、と團十郎は言った。

「ちつと話がある。あそこの丘まで来い」

立ち上がった鶴松が歩きだした團十郎に並びかけた。ひとつだけ聞きたいことがある、と團十郎は言った。

「大目付の遠山様とは、いつ話をつけた？ それだけがわからなく



てな」

養父が亡くなった時です、と鶴松が答えた。

「養父の自害により、鳥居の命で矢部家は改易かいえきとなりました。あの頃、矢部の権勢は強く、逆らえる者など誰一人いませんでした。ただ一人、遠山様だけが何も言わず、わたしの肩に手を置いてくれました。何も約してはいませんが、何かあればいつでも助けるぞという思いが伝わってきました。鳥居から百万両を騙し取ることを考えるようになったのは、そのすぐ後です」

鶴松が遠い目になった。そうだったのかい、と團十郎は丘の上で足を止めた。江戸の町が一望できた。

「これから、ますます世の中はこんがらがってくるだろう。一寸先は闇って奴だ。お偉い人達は、下々のことなんか考えねえ。浮き世はつまらねえことばかりだが、お前には運がある」

「何でしょう？」

お葉さんだよ、と團十郎は鶴松の背中を思いきり強く叩いた。

「いいか、あんないい女はいねえぞ。わかっくんのか、すつとぼけた面しやがって。おれもさんざん遊すんできたし、酸すいも甘いも噛み分けてきたが、吉原の太夫たゆうなんざお葉さんの足元にも及ばねえよ。はっきり言うが、どうしてあんないい女がお前に惚れているのか、おれにはさっぱりわからねえ」

「お葉さんが……わたしのことを？」

すつとぼけるのもいい加減にしろ、と團十郎は鶴松の着物の襟を掴んだ。

「ぶん殴るぞ、この野郎……お前がお葉さんに惚れてるのも、お葉さんがお前を好いているのも、談志師匠だつて蝸牛長屋の店子たなこだつて、みんなわかつてらあ。気づいてねえのはお前ら二人だけだ。本当に、馬鹿は世話が焼けるぜ……好き合ってるんだから、話は早い。お前の方から嫁になってくれと頭を下げろ。それで万事めでたしめでたしだ」

「そんな……それは七代目がそう思っているだけでは？ 勘違いだったらどうするんです？」

お前は腕も立つし、面も悪くねえ、と團十郎は肩をすくめた。

「だが、どうしようもなく鈍い野郎だ。つまらねえことを言つてねえで、おれの言う通りにしろ。惚れてるんだろ？ だったら土下座でも何でもして、はい、と言わせるんだ。ありゃあ、それだけの女だぞ」

「七代目はお葉さんとあんなにやり合っていたのに……どうしてそんなことを？」

本当にお前は鈍い男だな、と團十郎は背後に目をやった。

「いい女つてのはな、甘い顔してると付け上がる。知らん顔してり

や、向こうの方からやってくるのが相場よ。だから喧嘩を吹っかけていたが、上には上がいる。おれなんかの臭い芝居にや乗ってこなかった。くそ、どうしてあんないい女がお前なんかに……まあいいや、とにかくお葉さんがいなけりや、お前は腑<sup>ふ</sup>抜<sup>ぬ</sup>けも同然、お神酒<sup>みき</sup>徳利とはお前ら二人のこった。じゃあな、おれは行くぜ。いろいろ世話になった。鳥居への恨みも晴らせたし、やり残した事は何もねえ」

「七代目……」

借りができたな、と團十郎は鶴松の肩に手を掛けた。

「いいか、困ったことがあったら口笛を吹きな。どこにいたって、そいつが聞こえたら、おれは飛んで帰ってくる。借りっ放しつてのが嫌いなたちでな」

返事を待たずに、團十郎は丘を駆け降りた。あの野郎と一緒にいると調子が狂う、とつぶやきが漏れた。

「あんな馬鹿は見たことがねえ……とはいえ、嫌いじゃねえがな」  
それきり振り返ることなく、歩を進めた。爽やかな風が吹く朝だった。

## 閉幕

\*

天保十五（一八四四）年卯月（二月）、江戸市中に約百箇所の御救おすくい小屋が建てられた。

天保四年（一八三三）から天保十年（一八三九）まで続いた天保の大飢饉ききんは江戸三大飢饉のひとつに数えられるが、各所で大量の餓死者を出していた。

幕府はその救済のため、江戸市中二十一箇所に御救小屋を設置していたが、飢饉被害が酷かった東北地方から江戸へ流入してくる避難民は、天保十五年の時点でも絶えることがなかった。飢えに苦しむ者は更に増えていたのである。

新たに建てられた百箇所の御救小屋は、避難民たちに寝所と食事を与え、また職の世話をする場合もあった。

この百箇所の御救小屋設置に、幕府は関わっていない。篤志家とくしかによる寄付金によって建てられたと噂されていたが、それが誰なのかはわからないままだった。ただ、この御救小屋のためにおよそ五十万人が救われたのは事実である。

\*

体調不良を理由に老中頭の職を辞した土井利位に代わり、再登用されたのは水野忠邦であった。

かつて剃刀かみそりの異名を取った水野だったが、往年の冴えはなく、幕末に向けて激しく移り行く時代の波に翻弄されるばかりだった。その中で唯一行なったのが人事改革である。

正しくは鳥居耀藏に対する報復人事であった。職務怠慢、不正行為、その他さまざま理由をつけ、町奉行の職を取り上げ、それでも足らぬとばかり、他の役職もすべて剥奪はくたつ、全財産没収の上、讃岐さぬき丸亀藩預けとした。皮肉なことだが、鳥居が矢部定謙に対して取った処分と同じであった。

丸亀藩は鳥居を幽閉し、厳しい監視下に置いた。誰であれ鳥居との会話も禁じられたほど徹底したものだだったという。

二十三年の間、孤独と病に苦しみながらも、鳥居は生に執着するように生き延び、明治元年（一八六八）の恩赦おんしやにより、ようやく幽閉から解かれたが、江戸に戻った鳥居を待っていたのは、実家である林家からの冷遇だけだった。

明治六年（一八七三）、死去。

\*

遠山景元は職を取り上げられた鳥居に代わり、南町奉行に任じられた。まず最初に出した布告は、落語、歌舞伎、人情本に対する規制を緩和するというものだった。

江戸中の寄席よせが復活し、そこで落語、講談をはじめ、さまざまな演芸が演じられた。

人情本に限らず、版元の再興、出版についての禁令を撤廃した。これにより、作者はもちろんだが、絵師、彫り物師たちも作品を発表する機会が増え、多数の書物が流通するようになった。

歌舞伎においてもその事情は同じであり、猿若町の江戸三座（中村座、市川座、森田座）とその周辺に、芝居茶屋、あるいは役者、裏方たちが住まいを移したことで、猿若町は巨大な芸の町となり、それまで以上の隆盛を誇ることになる。

遠山の措置により、天保年間後期の息苦しさが消え、庶民たちもこれを歓迎した。

このように遠山が演芸全般、あるいは出版文化を保護したことが伝統となり、それは現在に至るまで続いている。

\*

七代目市川團十郎は嘉永二年（一八四九）、その罪を許され、江戸に戻ったが、市川座の舞台には上がらず、再び全国を旅して修行に励むと同時に、歌舞伎の普及に務めた。

二代目市川白猿はくえんなど、多くの名前を使って演じることを好んだが、團十郎の名前に頼ることなく、芸の研鑽けんさんに励む日々だったという。

また、多くの後進を育て、他にも狂言作家二代目河竹新七かわたけしんしちその他才能ある作家を助け、歌舞伎の隆盛に力を注いだ。

子宝に恵まれ、八代目、九代目市川團十郎、七代目、八代目市川海老蔵えびぞうがその跡を継いだ。

安政五年（一八五八）、久々に江戸に帰った團十郎は、『根元草摺こんげんくさずり引びき』で当たり役の曾我五郎そがごろうを演じ、翌年三月二十三日、多くの子、孫に見守られながら息を引き取った。六十八歳であった。

\*

寄席の復活により、初代宇治新口うじのくちこと立川談志は再び高座に上がるようになっていたが、高齢のためもあり、嘶はなしは『芝浜しばはま』をさらうだけ、というのが常だった。

『芝浜』は落語の演目の中でも人気の高い人情噺で、夫婦の愛情を温かく描いたことで有名である。

弘化元年（一八四四）に出版された『当代噺拾遺』<sup>とうだいはなしじゆうい</sup>に、談志の

『芝浜』が採録されているが、その枕は以下のようなものだった。

「世の中、夫婦は多うめおとございますけど、こりやいろんな夫婦がいますな。仲のいい夫婦もいれば、毎日喧嘩ばかりっていうのもいる。

あたし？ あたしんちは夫婦円満ですよ。ええ、そりやあもう。ええと、カミさんの名前は何だっけな……まあいいや、それでね、そりやあ変わった夫婦がいたんですよ。とにかく、どっちも惚れてるって、周りの連中はわかってるんですが、その二人だけはお互いの心がわかっていないんですよ。まあ見ていて焦じれたたいの何のって。それでまあ、あたしがお節介を焼いて、強引に二人をくつつけたんですけど、したらあなた、まあ仲睦なかむつまじいこと。夫婦ってのは難しいもんですな。さて、品川の袖ケ浦そでがうら、芝辺しばりに魚を行商している勝かつって酒好きの男がおりまして……」

弘化三年（一八四六）、談志は高座に上がって咄を終えた後に倒れ、そのまま亡くなった。六十歳であった。